九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第四世界の人類学

内藤, 順子
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/2338964

出版情報：九州人類学会報. 31, pp.41-41, 2004-07-17. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

セッションA・趣旨説明

第四世界の人類学

内藤　順子
（九州大学大学院）

第四世界に暮らす人びとはいかなる現実を生きており、外部世界はどのように彼らを取り巻いているのか。第四世界とは、「第一世界のなかにある制度からはずれる集団であり、例えば難民、不可触民、先住民、貧困者」を指しており［Manuel, G. and M. Poluns 1974］、また最近では「第一世界のなかで極めて困窮している人びとまたは、その他の集団や階級によって極端に周辺化している人びと」あるいは「主流文化に取り込まれつつ排除された人々の作る断片化した階層が出現する空間」［カステル 1999］とされる。だいぶ曖昧な使われ方がされているのが現状であるが、われわれがかかわる限り、第三世界のなかにも難民、不可触民、先住民、貧民などの制度からはずれた第四世界的状況が認められる。第四世界の問題とはいまや先進国のなかの南北問題だけではなく、第三世界のなかでの南南問題でもある。第一世界や第三世界というまとまりがNation Stateつまり国家という枠組みで区切られている一方で、第四世界の場合は国家の枠組みに包摂されない形であらわれている。となると、第四世界は第一世界のなかにあるべきという定義にほとんど意味はなく、むしろ問題は、第四世界の人びとが、国家の枠組みから外れているがためになんとか取り込まれようとしている点にあるといえよう。

本セッションではその是非について、そして第四世界への実践的なかかわり方や実際に生じている問題について、また、そこで人類学することの意味について考えるのが趣旨である。3人の報告者――飯嶋氏によるオーストラリアのアリス・スプリングスの先住民の報告と、針塚氏によるインドのデリーで働く子どもたちの報告、そして内藤によるチリのサンチャゴ市に生きる貧困者――それぞれのフィールドにおいて「改善すべき社会問題」として認識される事例をとおして、第四世界をその内部と外部の狭間から解剖すると同時に、研究者をふくむ外部者に可能な第四世界への実践的介入法の模索と、社会問題そのものがつくられるプロセスの検討をも試みる。

本セッション「第四世界の人類学」とは、研究途上にある各報告者の苦悩の出現の場でもある。この苦悩は単に、異文化体験や権力構造に対するジレンマによるものだけではない。それは捻れて重なり合った現実に対する理解の困難さによるものであると同時に、その捻れを平坦に受け入れてしまう世界が存在すること、その創られた平坦さに無意識に加担してしまいそうになる危うさを直に感じるからである。そして、さらに悩みを深めるのは、捻れや理不尽さがあるようにみえる第四世界に生きる人びとの日常が、いかにもふつうであることなのだ。そうした日常的世界を足場としたとき、これまであった社会問題や介入のありかたは一変する。それぞれのフィールドにおける足場の現状と、社会問題としての様相の「現実」を明らかにし、それらの「現実」に共通する問題からあらためて現代世界を考える「第四世界の人類学」とは、第四世界から発信するあらたな人類学の可能性への提言の試みでもある。3つの報告に続く片岡氏のコメントを含めて本セッションが「第四世界の人類学」の出発点となりえるよう「豊かに悩む」こととしよう。

参考文献

Manuel, G. and M.Poluns 1974 *The Fourth World: An Indian Reality*. Free Press.

カステル、マヌエル　1999『都市・情報・グローバル経済』大澤喜信訳、青木書店。